

Topics

「華の高専トリオ」が地産地笑で笑いを届ける掛け合い落語

公民館の和室で仲睦まじく落語の稽古に励む子どもたち。流暢に噺を繰り広げ、声の強弱や色を変えて感情の高ぶりや臨場感を表現。佐世保出身の放送作家・海老原靖芳さんが主宰して、「地産地笑」をモットーに落語

を披露する「佐世保かつちえて落語」子の会この面々です。12月8日(日)に春風亭昇太郎匠とコント赤信号を呼んで開催する『第21回 佐世保かつちえて落語会』(チケット完売)の前座披露に向けた特訓の最中でした。なんと、今回は佐世保



12月8日(日)開催『第21回 佐世保かつちえて落語会』の前座に出演する佐世保高専の(左から)古川咲弥(さくや)さん(2年生)、井上菜月さん(1年生)、間京華さん(4年生)。

高専に通う井上菜月さん(1年)、古川咲弥さん(2年)、間京華さん(4年)の3人が華の高専トリオとして、揃って一席を披露。コント赤信号もびつくり?の息の合ったトリオ落語を展開します。「3人が一緒になって同じ噺をするのは初めてですが、横に先輩がいるだけで安心感が違います」と弾ける笑顔で話す菜月さん。3人とも落語つ子に入った時期はほぼ同じ。学内でも同じ華道部で活動するなど、普段から息もぴったりです。「高座に座って、自分が話すことで、会場の空気を作りあげていく面白さが、落語にはありますね」と魅力を語る京華さん。間の取り方や口調など、試行錯誤しながら表現方法の模索を楽しんでいます。

「何度も稽古することで、噺が自分になじんでいく感覚が楽しいです。老若男女に届く落語を披露できれば」と意気込む咲弥さん。披露する演目は、知ったかぶりをテーマにした「転矢気(てんしき)」。海老原さんの愛と笑いの詰まった指導を受けながら、本番に向けて仕上げていきます。



指導にあたる海老原靖芳さん(右)。

当日は古川万葉さん(広田小4年)、日下野仁さん(祇園小5年)、藤田乙芭(おとほ)さん(大久保小6年)、瀧添たまきさん(長崎・琴海中2年)、進藤花菜さん(同)も前座に出演して笑いを届けます。